

TAKI no TAWAGOTO

By 濱 博一

本欄担当は、書くと約束してくれましたが…締め切りは過ぎ、時は流れてゆき…。今月も代筆で失礼致します。

幼い頃から鉄道少年で、特に蒸気機関車が大好きだった僕は、中学を札幌で過ごしました。辛うじて道内に走っていた蒸機を求め、親に買ってもらった一眼レフカメラと三脚を大事に抱え、校則もなんのその走り回っていました。

デジタル一眼レフカメラ（以下デジイチと略）を手にして徐々に撮影を始めた近頃。何気なく構えた自分の画角が傾いていることに気づきました。水平であるべき水平線が右肩上がりになっているのです。つまりカメラは右下がりに構えているようなのです。（今月表紙写真参照）

機材を自慢しようが、こんな写真を撮っているようでは、デジイチが泣きます。それにピンがやや甘いような気も…。ひょっとすると手振れか？プロはグッと寄った花のマクロ撮影でも、風景でも、三脚を使います。折角の大画素のカメラで撮ったからには、後日お気に入りの写真は大きく引き伸ばすはず。その時に差が出てしまいます。

かつての盟友三脚は家のどこかにあるはずなのですが探しても見つかりません。買ってあった安い三脚で夕景に挑戦しましたが、思うようにならず。腕を磨けばよいものを、今度は貧弱な三脚しかないせいにしてセミプロ級を物色していました。ネット通販では三脚も価格比較ができます。そこで他では4万円台のものが5千円も安いショップを見つけてしまい、ついつい注文…

翌日届いた現物は、それはそれは頑丈で見栄えもよし。これで、ついに腕以外に言い訳ができなくなってしまいました。（^^;ゞ



先々月発生した岩手・宮城内陸地震の被災者の皆様に心より、お見舞い申し上げます。

さて、この震災は専門家の緊急調査で、**これまでに無いほど被災地区が狭い範囲に限定されている**ことが明らかになりました。**東北の殆どの地域・観光地は全く無事**です。

にも拘らず連日の報道により、広域災害と誤解され、旅行のキャンセル・予約が入らない状況が既に東北全域に及んでいるようです。**被災周辺地域への風評被害は、経済復興の最大の障害**であり、被災地をフォローする周辺地域に対して余りにも冷酷です。どうか冷静な情報収集と判断をお願いいたします。（濱）

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2008/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2008/09

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

長 月



能登より富山湾・立山を望む
by hama

**がんばれ！東北
負けるな岩手・宮城！**

岩手・宮城内陸地震
風評被害対策勝手連プロジェクトに賛
同します！！

寄稿 『日本一流行らない「朝市」のお話』

遠州横須賀倶楽部 大番頭 鈴木武史

毎月第四日曜日早朝、遠州横須賀のほぼ中心部に位置する「三熊野神社」境内。冬ならまだ暗い時刻に怪しい人影がうろつろ、お参りに来た人でもなさそう・・・

遠州横須賀倶楽部が主催する「三社市」は今から二十年以上も前の昭和六十二年より始まりました。古文書によれば応仁年間、本町通りは荷次馬次の場所として栄え、三熊野神社周辺には「三社市場」という市が立っており大変な賑わいだったそうです。その市を現代の世の中に復活させ、町の活性化につなげようと「三社市」は始められました。当時としては、こうした朝市自体が珍しかったことあってけっこう話題を呼び、出展者の募集をしなければたくさんの出展希望が殺到、出店の調整を行っていたほどでした。当初は二ヶ月に一回の開催でしたが、その活況ぶりに気を良くし一年後には毎月行なうことに。境内には採れたての新鮮野菜や特産物、手づくりのもの趣味のもの、またうどんやフランクフルトまでありとあらゆるものが並べられ、大勢のお客様で賑わいました。

しかしその盛況ぶりもそう長くは続きませんでした。あつちでいこうんな「市」が始まったり同種のイベントが行なわれたり、出展者もより人が集まるほうへ売り上げがあがる方へと移動、開催ごとに一店また一店と出展者が減り始めました。こうなるとあとは潮が引くがごとく寂れるばかり、店が減ればお返し「で若干触れていた。

濱のいびきを 『流れ』

「縁」と「言」で済ませている「有難い(稀な出来事)」について、先月に続きである。六年前の十二月号本欄「恩返し」で若干触れていた。始末のことを「当たり前前に起きている」と勘違いしている今日、それが稀なことであり有難い確率の出来事であるとは思いつくなくなっている。感謝が少ない人は、こうして生まれ、増えてゆく。

何かの体験を通じて、当たりの前と思ひ込んでいたことが、実は中々実現が難しく、水面下で相当な工夫や努力が行われた上でのごとだと気づいたとき、当たりの基準がガクンと変化する。

有難いことをしていたのだと感ずることができたとき、自然に感謝の気持ちが沸く。重要なことは、その後である。

その気持ちは誰に返すのだろうか？

普通は「有難いこと」をして頂いた相手の方に返すのが「恩返し」だと考えられている。しかし、これでは当事者である二人の間だけで、やっぱり取ったり回しているに過ぎない。そこから発展することは難しい。

そこで少し、発想を転換してみたい。

頂戴した恩は、ちよっぴり自分の利子を付けて後輩や、その後に出逢った人々、つまり次代にお返ししてはどうだろうか。時代の人々もまた、同じように「各々の

客さまが減る、お客さまが減ればますます店が減る、まさに悪循環とはいうこと・・・

時は流れ平成二十年六月二十二日(日)早朝、三熊野神社境内には数人の横須賀倶楽部員が集合し何やら準備が始まった。もち米をセイロで蒸かし臼と杵でお餅につきあげる。その出来たてのお餅にあんこを入れて大福餅に、一パックニケ入り二百円で販売開始、でもそれを買うお客様は見当たらない。もちろん他の出展者の姿もない。そうこうしているうちに「白目の餅がつきあがる。おや、お客様だ。いつもの常連さんが一パック、もう一人、こちらも犬の散歩がてら寄ってくる常連さん」「ニバックもらおうかな」お客様はたったこれだけ。残りは主催者自らが五パック十パックと買ってゆくのすべて完売。これではまるで自分たちのために朝早起きをしてお餅をついているようなもの(笑)お客様より主催者のほうが多い市、こういう状況でありながら休むことなく十数年間も続いているきわめて珍しい市、それが「三社市」です。

こんな流行らない市がなぜ延々二十余年も続いているのか？その理由とは・・・

「別にやめる理由がないからさ(笑)」

来月もさ来月もそしてその次の月も、三熊野神社境内にお餅をつく音が響いていることでしょう。



【プロフィール】
おすぎ たけつこ
「生まれも育ちも遠州横須賀、生え抜きの五十歳。笠井屋陶器店店主。静岡県 遠州横須賀御城下 新屋町住
<http://kasaiya2.jyokamachi>

ちよっぴりの利子」を付けて次の人に返してゆく・・・

すると、どうなるだろうか？

恩と感謝が、せせらぎのように流れ始め、小川のようになり、やがて立派な川のように人々の間を流れ始めはしないだろうか。

中には自分の中だけに溜め込んでしまつ人もいるだろう。でも、気にする必要はない。その人が抱え込んだ恩は水と同じで、やがて賞味期限が切れれば、いずれは消えうせてゆく。「旦那」という言葉の語源はサンスクリット語の「ダーニャ」だという。ダーニャには「布施をする人」という意味がある。周りに提供することもできないで抱え込んでばかりの人は、表面的には一見豊かなダンナのように見えても、真の旦那にはなることはできない。

だから、みんな「ちよっぴりの利子」を付けて、次の人にお渡ししてゆこう。それが川の流れの如く、サラサラと清く輝くように流れてゆくことをイメージしながら。

この川のためとに佇めるのは、幸せなことだろうと思う。源流や上流にも思いを馳せ、自らもそこに関わることできる。

いくつかの川が合流して大河になって行くとき、この世はぎっと変わっていることだろう。そこに流れている水は、関わった人々の恩と感謝と透き通った意志と、それぞれのちよっぴりの利子の一滴一滴が集まったものであるのだから。

『モチベーションについて考える（その3）』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

前回モチベーションにはその源泉となるものがあり、これをモチベーションリソース、略してモチリソと呼び、組織型、職場型、生活型、仕事型の4つあるという話をしました。

高度成長期の日本は、がんばれば人も組織も日本も成長できました。給料も地位も仕事の範囲も生活の豊かさも全て、つまり4つのモチリソが全て充実していた時期といえます。

しかしバブル崩壊以降は、このモチリソが機能不全し始めました。そんな中で企業経営者は打開策を考え、成果主義の給与体系の導入や、組織のフラット化、アウトソーシングや派遣社員の活用などで、組織の筋肉質化を図ってきました。

しかし、部長、課長と呼ばれることにやる気を感じていた組織型モチリソの強い人は、肩書きをはずされたり、新肩書きとして●●リーダー、とかユニット長とか呼ばれたりするようになり、なんとなく釈然としない思いを持ってしまいました。でもこんなことでグチる訳にはいきません。

また、チームでの協働や一体感にやる気を感じていた職場型モチリソの人にとっては、職場内に非正規雇用のメンバーや、多様な価値観を持つメンバーが増えてきたので一体感が持ちにくい職場となったため、疲弊感を感じるようになってきました。

組織型モチリソの刺激策として導入した成果主義の人事制度も、期待した結果をなかなか発揮することができず、逆に達成可能な低い目標しか設定しない風土や、自らの成果を優先するために、職場内でノウハウを共有しないという副作用が目立つようになり、見直しを図る企業が多くなってきています。

組織内での昇進にやる気を感じて、自らも出世してきた管理力が、部下の中堅社員に対して、「君ももうちょっと頑張れば管理職になれるぞ」と鼓舞しても、昇進がモチリソとなっていない部下からすれば、「そんなこと言われても・・・」ということにしかありません。

無自覚に自分のモチリソと、相手のモチリソが同じだと思ってしまうことによる、こういったギャップが組織のそこかしこで生まれるようになっていきます。

さて、4つのモチリソの中で、その中核として考える必要があるものは仕事型モチリソです。仕事そのものの目的、仕事のプロセスの中での発見や工夫、裁量の余地、仕事から得られる経済的な報酬や個人に蓄積できる知識、技術、人脈などといった非経済的な報酬など。

この仕事型モチリソをどうやって刺激すればいいのかについては、次回改めてお伝えします。

『温泉への誘い(66) — 鹿児島温泉 —』

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

『「火をおこす」と「火をつける」』

合同会社アイアイシー 山田 浩市

「おこす」とは何か？を考えるとまず思いつくのが「火をおこす」。検索すると、「火のおこし方」という石川県の埋蔵文化財センターがトップに出てきました。古代の火の作り方が色々紹介されていて、実際に試したコトのあることや知らなかった方法などとても興味深い内容で、いざ！という時にも十分役立てることの出来る情報でした。

冒頭の、「人は最初、噴火や雷など自然現象でおきた火を使用していました。」の一節は、忘れそうになっていた「何か」をもう一度考える瞬間をもらったような得した気分です。「最初は自然におきた火を・・・」。濱先生に勝手連の考え方を教えていただいた頃、ああ、このままじゃイカンなあ～と思い始めていたボランティアグループが解散しました。某日、解散式に出席、普通の飲み会でした。さして緊張とか今後の展望とかそんな感じではなく普通に芸人のスケベ話にハマったり、金華山の登山をカタチから入る方法とか、・・・それだけ寝耳に水っぽい解散。コンサバ強し、出すぎた釘でしょうか。

さて、「火をおこす」を思いつくと「火をつける」とどう違うか？が知りたくなりました。まず、単に「おこす」という単語で再検索すると、「コンドームで火をおこす方法」というページが、90万3000件のトップに躍り出ます。どういう内容かはそれぞれの皆様のご判断をいただくということで・・・

なるほど、人の興味というのはそうやって作られるんだ。検索結果という概念が今までのデータ分析用の、予測用のツールに近かったものが判断基準のレベルまで上げて良いのかなと、ぼちぼちそういう時代かなと思います。思うのが遅いかもかもしれませんが・・・

「火をつける」になると、やっとYahoo辞書とかAmazonのコーチングの本とが掛かって、後に心に火をつける。ハートに火をつける。ペットに火をつけ2階から・・・。後は謀議員さんのWikiとかが続きます。内容的には「きっかけ作り」という感じが「火をつける」という行為に近いニュアンスでしょうか。つける瞬間までの過程だったり、いわゆる「点火」だったり。

産官学のまちおこし事業に係っていたのですが、今考えると「着火」や「点火」を求める事が多すぎたのかも知れないと考えたりもします。

おこしは点火だけではなく持続。焚き火の「オキ」、ある程度燃えた太い木に残っている熱源。どこかに行けば、何かを見ればそんな熱源を、皆が感じられるものにどう表現していくか、例えばキャラクターでも、CFや海外ドラマのシナリオにはやられます。どうやって最初にあれをイメージするのか。確実に掴んで、そして記憶させます。つけるとおこすを上手く使い分けているのでしょう。

「点火する」インパクト「持続する」コンセプトおこしのコツが、少し掴めたような気がします。

『富士の国から ～大魔神のたび～ 富士登山1』

静岡県観光局 溝口 久

「登らぬ馬鹿、二度登る馬鹿」と言われる富士登山。静岡県にいながらこれまで一度もチャレンジしたことはなかった。乗鞍スカイライン、千畳敷きカールに20代の頃行った時に頭は痛むし、呼吸も芳しくなかった。

飛行機も長時間乗った後、着陸態勢に入ると頭が締め付けられるように痛くなる。拳句の果てにエコノミック症候群で搭乗後には、まともに歩けないような状態になる。要は高山病間違い無しと言う訳だ。それに加え去年は1月にテニスでアキレス腱を切断し、完全な脚に戻っていない。もう永久に完全にはならないと思う。富士登山などできぬ理由ばかりを並べた。おっと「公務員はできない理由を並べるのは天才的」と言った北川三重県前知事の言葉が頭をよぎる。でもこの富士登山だけは諦めていた。

ところが、観光局に異動になり、この時期になると富士登山の問い合わせの電話が多くなる。登ったこともないのにアドバイスはできない。機会があれば、せめて7,8合目ぐらいまではと思っていた。

そこに7月26日(土)富士山麓の小山町から「金太郎祭り」の招待があった。これまでNPOや観光協会のあり方など話に度々行っていたこともあり、その時に会った皆に会いたいという気持ちも手伝って職場同僚を二人誘って出かけることにした。小山まで行くのだ。翌日は日曜日。登るしかない。

でも登れるところまで、頂上を目指す気はさらさらしない。と言うわけだから昼間は川のイベントで飲み、夜は町民総出の夏祭りで飲み、気がついたら23時。小山町の友人の小野さんが「明日は5合目まで送りますから、何時に宿に迎えに行きましようか？」御来光を見ることは予定になく登頂の気もないのだから、6時半でいいですよと答えた。

富士山には富士吉田口、富士宮口、御殿場口そしてこの須走口の4つの登山道がある。須走口は標高2000mから登り始める。6.5時間で頂上である。「たくさんさんの緑となだらかな傾斜。須走口は優しい登山道」とパンフレットには記されているが、最も長く歩くコースである。

翌朝6:30約束どおりの時刻に宿を出発、コンビニで昼食と飲み物を仕入れた。すぐそばにある富士浅間神社から登山口の須走口新五合目(標高2000m)までは車で30分弱、神社前にある駐車場に車を停めれば富士登山バス片道1160円で運び上げてくれる。新五合目には駐車場はあるものの御来光目当ての登山者の車でいっぱいとなっており、道端にはたくさんの路上駐車車の列が2キロ以上に亘って続いていた。送迎のタクシーもあり3人で乗ればバス代以下だ。下山の時このタクシーに大いに助けられることになる。(つづく)

